

登場人物

慎人 渡辺 慎人) 永和工業所 社長
哲也 竹原 哲也) 永和工業所 専務 慎人の従兄弟
江藤 江藤 恭二) 信用金庫 営業
美和 渡辺 美和) 慎人の妹
あかり 渡辺 あかり) 慎人と美和の義姉
さっちゃん 今枝 里美) 永和工業所 事務員
友樹 申辻 友樹) 永和工業所 工員
啓太 六木 啓太) 永和工業所 工員
シュン 松田 俊介) 永和工業所 工員
淳史 竹原 淳史) 哲也の息子

#0

市内の片隅にある町工場 永和工業所の事務所。
書庫、事務机などの他に、休憩と打ち合わせスペースを兼ねたテーブルがある。
工場の出入り口・作業場が続くドアの他に、応接室、住居、給湯場が続く出入り口が見える。
雨の中、慎人が現れた。濡れたコートをの雨を払っていると、電灯がついてあかりが現れた。

あかり 慎人くん？
慎人 義姉さん。・起きてたんや。
あかり もう びっくりするやない。来るなら来るって言うといってくれんと。
慎人 ごめん。いろいろ片付けてたら 新幹線、最終になってもうて。
あかり 寒かったやろ。上がって。あったかいお茶でも淹れるわ。
慎人 先に、線香・兄貴に。
あかり そうやね。
慎人 ・よかった。思ったより元気そうや。
あかり そう見える？
慎人 葬式の時、そのまま消えてしまいうるなぐらい 顔、真っ青やったから。
あかり それどころとちやうかつたんよ。いろいろ。
慎人 カウンターを見て、タイムカード、えらい減ったな。
あかり 半分になったわ。お義父さんの代からの職人さんは みんな。
慎人 聞いた。せやから帰ってきてん。
あかり どういうこと？
慎人 ・辞めてきた。仕事。
あかり えっ。仕事って、お店は？
慎人 たたんできた。

あかり　なんで？

慎人　工場（こうば）しよかなと思って。

あかり　慎人くんが？

慎人　俺しかおらんやん。あかりさん　一人ではどうにもならんやろ。まあ、俺も素人やけど。

あかり　いいの、本当に。

慎人　どうやろ。やってみんとわからん。

あかり　．．．もう。

慎人　なんかな、呼ばれた気がしてん。

あかり　え。

慎人　この工場に。葬式の後、空っぽの作業場で旋盤見てたらな、なんか。そういう気がしてん。．．．気のせいかも知れへんけど。

あかり　慎人くん。

慎人、頭を下げた。

慎人　よろしくお願いします。

雨の音、少し大きくなる。

1

半年後、夏。

昼食を済ませた啓太、友樹、さっちゃん、ラジオを囲んで高校野球の中継に耳をすませていた。

ややあって、カキン！』というバットの音。

「打ったか？」　「どっち？」などと歓声をあげる従業員たち。

啓太　しーっ、しーっ、聞こえへん！

ふたたび全員ラジオに耳をすませる。

啓太　．．．あかん、フライや。

さっちゃん　あーあ．．．

友樹　ツーアウトか。

啓太　まだまだ。野球はツーアウトからですって。

友樹　9回やで。

さっちゃん　水野の次って誰やっけ。

啓太　たぶん代打です。

さっちゃん　えー、めっちゃプレッシャーやん。9回表ツーアウトのこんな場面で。

友樹　もう勝負はついたから、甲子園の思い出に　バッターボックス立ってこい、みたいなことちゃう？

さっちゃん　あー、土持って帰る、みたいな。

友樹 そうそう。

さっちゃん 思い出なあ。そんな苦い思い出、わざわざ作ったらんでもええのに。友樹 もしかしたら、今年はこのまま PLが優勝するんちゃうか。

啓太 静かにしてください。こいつらはまだ、あきらめんと戦ってるんです。

友樹 ごめんごめん。

シユンが作業場の方から現れた。

シユン お疲れ様です。

さっちゃん シユンくん、お昼置いてるから食べてや、って。

シユン はい。

さっちゃん 社長は？

シユン まだ旋盤回してますわ。

さっちゃん 1時に江藤さん来るって聞いてるけど。食べへんつもりかなあ。

シユン さあ。。。トモさん。

友樹 ん？

シユン 社長、あれ、何作ってるんですか？盆前からずっとじゃないですか。そんな仕事ありましたっけ。

友樹 いや、何も聞いてへんなあ。

さっちゃん 約束って言うてましたよ。

シユン 約束？

さっちゃん 江藤さんと。

シユン 江藤さんって、信金の営業さんでしょ？ そんな人がなんでウチの部品を。

友樹 もしかして。

シユン なんです？

友樹 あれちゃうかな。仕事くれそうなど、紹介してくれる、とか。

さっちゃん そうなん？

友樹 江藤さん、聡志さんと仲良かったやろ。せやから、ウチの会社のこと気にしてくれて、それで・・・

シユン そらちよっと、甘いんとちゃいますか。

友樹 そうかな。

シユン いくら亡くなった社長と仲良かったいうても、銀行って結局、自分とこの儲けになれへんかったら動きませんよ。

友樹 せやから銀行も、ウチに仕事まわして滞りなく返済できるようにした方が得やんか。

シユン そらまあ。

友樹 たぶんサンプルとか、技術がわかるモン作ってるんちゃうかなあ。

シユン でもそれやったら尚更おかしいですよ。技術がわかるサンプルやったら、テツさんが作らんと。社長、まだ旋盤さわり始めて半年やのに、技術ないって言いふらすみたいなものじゃないですか。

啓太 あー。

ラジオを聞いていた啓太、悔しそうに肩を落とした。

友樹 終わった？

啓太 終わりました。池田三連覇ならず。くそう、水野が打たれるとは思わなかった。

友樹 最初のホームラン打ったんも このピッチャーやろ？桑田やったっけ。まだ一年

やのに バケモンやな。

シユン 時代ちやいますか。

啓太 時代？

シユン 世代交代。新しい時代ってことですよ。

友樹 新しい時代ねえ。

制服姿の淳史が現れた。

淳史 ただいま。

さっちゃん おかえり。

啓太 なんや淳史、今日は夏休みちやうんか。

淳史 登校日。・お父さん、おる？

さっちゃん ちよつと用事があるって出て行ったけど。急ぐんやったらベル呼ぼか？

淳史 じゃあ、戻ってからでいいよ。三者面談、いつ来れそうやって先生が。

さっちゃん 三者面談。

淳史 進路のことです。でもお父さん仕事やんな。昼間時間取れる日ってあるん？

さっちゃん そうやねえ、相談してみんとわからんねえ。

スーツケースを携えた美和が外から現れた。

美和 こんにちは。

友樹 あ、美和ちゃん、久しぶり。

美和 兄さんおる？

さっちゃん 作業場に。

美和 待たせてもらっていいかな。

さっちゃん どうぞ。

美和、壁に貼り出したトーナメント表を見た。

美和 高校野球？

啓太 ええ。

美和 今年もやってんねんや。

啓太 慎人さん、興味ないかなと思ったんですけど、やろうって言うてくれはって。

美和 聡志兄ちゃんは好きやったもんな。

啓太 ええ。

美和 ええんちやう。蒸し風呂みたいところで仕事してんねんから、これぐらい楽し

みがないと毎日やってられへんやろ。

啓太 いやー、そうなんスよね。

友樹 賞金は半額ぐらいになりましたけどね。

さっちゃん 賭けてる人数がちがいますから。しょうがないですよ。そのかわり、お中元のビール、付けてるでしょ。

美和 今、誰が勝ってるの？

啓太 えーっと、池田が負けたんで僕とトモさん、シュン、さっちゃん、社長、淳史、あかりさんの勝ちはなくなりましたね。

美和 えっ、池田負けたん？

啓太 そうなんですよ。7対0。

美和 7対0って、ボロ負けやん。

啓太 言わんといってください。

美和 ほんなら一位はテツさん？

啓太 専務と江藤さんの一騎打ちです。

美和 江藤さんって信金の？

啓太 ええ。

美和 へー、まだやってんねんや。

啓太 そうなんですよ。社員じゃないのに、ありがたいですよ。

美和 でも銀行さんやったら、ぎょうさん給料もろてんのに、得意先のカケで本気で勝ちにこんでもええと思わへん？ なあ。

あかりが奥から現れた。二人を見て。

あかり あら、美和さん、いらっしやい。

美和 こんにちは。

あかり 旅行？

美和 旅行というか、帰郷というか。

あかり 帰郷？

美和 実家に帰らせてもらいます」ってやつ。

あかり えっ。

その場の人たち、ひきつった笑みをうかべた。

美和 笑うでしょ。ビックリすると、人ってなんでか笑うんよね。

あかり えっと・・・

美和 言うとかけど、私は冗談のつもりはないから。

あかり・・・なんで？

美和 端的に言うとお金かな。いやでも結局・・・人間？

啓太 ザックリしすぎやろ。

あかり なにがあったん？

美和 長くなるけど、いい？

さっちゃん あかりさん、もうすぐお客さん。

美和 後にしよか。上、部屋空いてるよね。

あかり 部屋って。

美和 お父さんとお母さんのところ。

あかり あ、そこは・・・

淳史 空いてへんよ。今、僕とお父さんが住んでる。

美和 テツさんとあつくくんが？

淳史 うちのお母さんも、美和さんと同じように出ていったから。

美和 えっ？・・・テツさんとこ、そうなん？

あかり 春ごろかな、テツさん一人やと食事とか身の回りのことも不便でしょ。あつく

んもまだ高校生やし。せやったら上に住んだらって慎人さんが。

美和 そうなんや。

江藤があらわれた。

江藤 こんにちは。

さっちゃん あ、江藤さん、いらっしやい。

江藤 社長はお手すきですか？

啓太 呼んできます。

啓太、出て行った。

友樹 俺も仕事戻るわ。

シュン お昼いただきます。

友樹は作業場へ。シュンは奥へ去った。

さっちゃん、江藤に待つように促す。

さっちゃん どうぞ。

江藤 失礼します。

さっちゃんはお茶を淹れるために給湯場へ。

美和 とりあえず、荷物置いてくるわ。

淳史 おばさん、手伝うわ。スーツケースを持つ。

美和 淳史、その「おばさん」は止めて。

淳史 なんで？お父さんの従兄弟やから僕にとっては叔母さんやろ？

美和 そうやけど、オバさんはアカン。

淳史 じゃあどう呼べばいいの？

美和 名前かな。

淳史 美和さん。

美和 そうそう。

淳史 わかった。

美和、去った。

あかり もう来ると思うんで。

江藤 金融公庫には訊かれましたか？

あかり ええ。融資が断られた理由ですよね。社長が訊いたみたいですけど、総合的に判断して「て言うだけで、ハッキリとは。

江藤 融資の審査がなぜ通らなかったか、絶対に明確な理由は言いません。でも、どのあたりに理由がありそうかは、できるだけいろいろ会話で食い下がって、見当がつけばと思っただんですけど。

あかり 慎人さんもテツさんも、職人というか、そういうタイプやないですから。

さっちゃん、お茶を持って戻ってきた。

あかり あの、他に融資の打診をした銀行さんからは、持ち株を抵当に入れたらって言うわれたんですけど。

江藤 あまりよくないですね。持ち株を抵当に入れば、万が一の場合、会社が合併されるかも知れません。

あかり 慎人さんもそう言っていました。あの、私、ようわかりませんが、聡志さんは儲けに走ることはありませんでした。けど、支払いはちゃんとしてたように思います。

何が問題なんでしょうか。

江藤 僕の推測ですが・・・おそらく確信が持てないんだと思います。

あかり 確信。

江藤 慎人さんは、これまで個人の店舗で飲食業をしてこられて、製造業の経験はほとんどありません。機械に関する知識も浅く、太い顧客といえば、先代がこれまでお付き合いしてきたところばかりで、まったく実績がない。そんな状態で新規販路を開拓するための追加の融資をと言われても、確実に回収できるといふ根拠を示さなければ、融資は難しいでしょうね。

あかり そうですか・・・

江藤 ひとつ、方法はあるにはあるんですが。

あかり なんです？

江藤 ウチでプロパー融資を受けていただきます。

さっちゃん なんですか、プロパー融資って？

あかり さっちゃん。

さっちゃん すんません。なんか聞いてられなくて。

江藤 信用協会をさまずに、直接銀行から借りる融資のことです。保証をつけないので貸し倒れのリスクはウチが負います。

さっちゃん そんなん、できるんですか？

江藤 亡くなった聡志さんには何度もお世話になりました。親戚も知り合いもないこの土地で、最初に口座を作ってくれたのも聡志さんです。だからできることはさせていたいただきたいんです。

あかり 江藤さん。

さっちゃん ありがとうございます。

江藤 ただ・・・一つ、条件を出させてもらいました。
さっちゃん 条件？

慎人がやってきた。

慎人 すいません、お待たせして。
江藤 いえ。・・・どうですか？

慎人、江藤にパーツを渡す。

慎人 確認してください。
江藤 わかりました。

江藤、パーツを調べ始める。

さっちゃん 社長、なんですか、あれ？

慎人 嵌合 カンゴウ）や。

さっちゃん カンゴウ？

慎人 機械作る時、穴に軸をはめ込むんやけど、これをピッタリ隙間なく削れるベテランの職人が、今のウチには残ってへん。

江藤 品質に関わる大切な技術です。百分の1ミリの、手の感覚で削り出す技術。叩くと入るが、入ったら抜けない、そういう嵌合です。

慎人 どうや、江藤さん。

江藤 ・・・・いい感じです。きっちりハマってる。

慎人 これやったら機械作っても売れるやろ。

江藤 ええ。

あかり 慎人くん・・・

さっちゃん 社長、凄いです！ たった半年でこんなん、

慎人 まあ、ニンゲン死ぬ気でやったら、なんでもできるっちゅうこっちゃ。

さっちゃん そうですね！

江藤 いや、本当にこれはすごい。こうやって力を入れて引っ張っても・・・

パーツから軸がスーッと抜けた。

江藤 ・・・・えっ。

慎人 ・・・・えっ。

さっちゃん 抜けましたね。

あかり 入ったら抜けへん言うてへんかった？

江藤、軸を戻そうとするが焦って入らない。

さっちゃん 江藤さん、叩かな入りませんって。

江藤 そうか、なんか、叩くもの・・・
さっちゃん 金槌を出した) これ!

江藤、パーツを金槌で入れてゆく。そして再びパーツの軸を引っ張る。
軸はやはりスーッと抜ける。

江藤 これはこれで、悪くない技術だとは思いますが。

慎人 もういいです。・江藤さん、融資の話・なんとか・・・

江藤 ・僕も進めたいと思うのはヤマヤマですが、この結果はぐつが悪いというか・・・
慎人 そこをなんとか・・・

あかり、パーツを手を取った。

あかり 私、これ買います。

江藤 えっ。

あかり 私の貯金と聡志さんの生命保険のお金、それでこの嵌合、買います。それでこの会社、立て直してください。

慎人 あかりさん、そんなことしたら・・・

あかり 聡志さんが残してくれたお金、自分のために使うのはちよつと違うなあって、私ずっと思ってきました。やっとなわかりました。この工場のためになるんやったら、あのお金使ってください。

慎人 あかりさん。

あかり、慎人の手を取った。

あかり この手。まだ半年やのに、ダライコの火傷と切り傷と油でボロボロで。あの人と同じ手になってもうて。工場継ぐ気なんかなかったのに、カッコつけて戻ってきて、何やってもあの人と比べられて、我慢して、せやから。

江藤 ・いけません。

あかり なんです？

江藤 聡志さんのお金は、あかりさん自身のために使うべきです。間違っても工場のことに使ってはいけません。そんなことをされたら、社長としての慎人さんの面目はつぶれてしまいます。

さっちゃん 江藤さん

江藤 ひとまず、これ。ペーツは預かります。プロパーの融資が取りつけられるよう、私が上司に掛け合います。もつとも、嵌合がこの状態では、結果は何とも言えませんが・・・

哲也が現れた。

哲也 お疲れ様ー。あ、江藤さん。よかった、間に合った。

江藤 テツさん。どうしました？

哲也 いや、おたくの融資、これ抵当に入れたら貸してもらえるかなと思て。
江藤 抵当？

哲也、持っていた封書を江藤に渡す。江藤、中の書類を見た。

江藤 住宅ですか。

哲也 ウチの家や。どや、これで借りれそうか？二応市内やで。

江藤 ええまあ、担保があれば借りやすくなりますが。

哲也 今は誰も住んでへん。アイツも戻ってくる気配もないし、もうええかと思て。
あかり 淳史くんは、このこと知ってるんですか？

哲也 知らんと思うで。何にも云うてへんから。

さっちゃん えーっ、かわいそう。

哲也 そんな深刻になることちゃうやろ。売ったわけと違うねんから。

さっちゃん でも・・・

哲也 ちゃんと働いて返したらええだけや。なあ、マサ。これでどうにかしのげたら、
頑張って会社持ち直すで。なあ。

慎人 ・・お前らみんな、アホばかりや。

やや間。江藤、立ち上がった。

江藤 ひとまず、持ち帰って検討させていただきます。審査結果が出次第、書類をお渡
しりするということで。

哲也 任せるわ。

あかり よろしくお願いします。

江藤 また連絡します。では。

江藤、去った。慎人、安心したのか座り込む。

さっちゃん 社長、

あかり 慎人さん？

さっちゃん 大丈夫ですか？

慎人 ・・なんか、氣い抜けたわ。

あかり お昼、食べる？

慎人 せやな。腹減ってきた。

あかり テツさんも。

哲也 俺はええ。外で食べてきた。

あかり そう。

慎人、奥へ行きかけて足を止めた。

慎人 テツちゃん。

哲也 ん？

慎人 すまんかったな。

哲也 気にすんな。

慎人 けど、権利書取りに行ったってことは、俺が嵌合作られへんと思ってたってことやんな。

哲也 アホ。あんなもん、1年やそこらで、できるわけあるかい。

慎人 今にみとけよ。

慎人、去った。

哲也 さっちゃん、お茶もらうで。

さっちゃん はい。

哲也 ホーナメント表が目にとまった) お、PL勝ったんか。ヨシヨシ・・

美和が現れた。

美和 あ、テツさん。

哲也 おー、美和ちゃん。久しぶり。

美和 ひさしぶり。ホンマやったんやね。淳史と此処に住んでるって。

哲也 まあ、いろいろあつてな。

美和 家、戻らへんの？

哲也 まあ。

美和 ・・まいったな。

哲也 どないしてん。

美和 出てきてん。私も。

哲也 え？

美和 ちょっと聞いてくれる？

哲也 いや、今仕事中・・

美和 (哲也の手を引っ張って強引に座らせながら) 私の旦那のお義父さん、こないだ亡くなつてんな。

哲也 ああ、なんか聞いたな。

美和 泉州でタオル作っててき、言うたっけ？

哲也 いいや。

美和 お義父さんが社長で、旦那もそこで働いてて。それが、亡くなったら見つかったん。借金。

哲也 いくらや？

美和 4億。

哲也 えっ、

さっちゃん ええっ！

美和 びっくりするやろ。もう、私も旦那もお義母さんも、全然知らんかって。晴天の霹靂。

哲也 なんでそんな大金・・

美和 会社の負債やって。弁護士に言われて、みんなどうしようってなつて。

さっちゃん どうしたんですか？

美和 即廃業やん。会社も旦那の実家もすぐ処分して、整理してもうて。

あかり 美和さんの家は？

美和 私らが住んでる家は大丈夫やったんやけど、お義母さんが住むところなくなったからウチに転がり込んできて。

あかり 同居？

美和 同居、同居。

さっちゃん それで家出はったんですか？

哲也 えっ、家出たん？

美和 まあ…。初めはな、気の毒やなと思ってんで。ちょっと合わないところはあったけど、悪い人やないし、しょうがないかなって。でも毎日毎日亡くなったお義父さんの悪口っていうの？ 愚痴ばかり聞かされてたら私も参ってきてさ。

さっちゃん 旦那さんは？

美和 それどころちゃうやん。自分も勤めてたから、すぐに次の仕事探して。周りに合せる顔がないからコソコソ隠れるように朝早く出て、夜中に帰ってきて。その間私はずっとお義母さんの愚痴聞かされて。

あかり 美和さん、パート行ってたんじゃ…

美和 辞めたよ、そんなん。すぐ噂になるもん。ホンマは引越したかったけど、そんなお金もないやん。私も旦那とおんなじ。毎日人目につかないように、外出は最小限に控えて、買い物も近所の人がない遠くの店まで行って。

さっちゃん うわ、大変…

美和 お義母さんもさ、一応気は使って料理とかしてくれるねんけど、これがもう、全然美味しくないのよ。

あかり それは気まずいからとか…

美和 じゃなくて、物理的に味付けが下手で。

さっちゃん 残念ですね。

美和 料理だけじゃなくて、家事全般苦手さ。

さっちゃん ええ。

美和 今までちよっとええ暮らししてたっていうか、贅沢やったんよ。だから食事は外食ばかりで、料理なんかほとんどしてへんかったし、洗濯も何かあったらすぐクリーニングに出してたし、掃除も普段はほとんどしてなくて、でも二人とも目悪いから平気で。

さっちゃん そういう人がいきなり家事って、

美和 そうやねん。急に上手くなるわけないやん。結局二度手間になるだけやし。

でも私が「いいですから」って断ったら、いじけるねん。

さっちゃん あー、面倒くさい。

あかり さっちゃん。

さっちゃん すんません。

美和 いや、ホンマに面倒くさいから。

哲也 …それで耐えられんと出てきたんか。

美和 ちよっと冷却期間を置いて、考えたいなと思って。

哲也 4億なあ。

美和 けど一つ、わかったことがあるわ。
さっちゃん なんです？

美和 借金って、億越えたら笑うしかなくなるで。
さっちゃん そんなもんですか。

美和 そんなもんやって。弁護士先生も言うてはったわ。何千万とかやったら責任感の強い人は、自分に生命保険かけて命にかえても・・みたいに死ぬこともあるらしいけど、億越えたら何やっても無理やん。千億で、そんなん、ムリムリ、うっひやっひやっひやっひやっ”って。

さっちゃん なんか、笑ってばかりですね。

美和 オモロすぎて気いおかしくなるわ。・・なあ、テツさん。

哲也 なんや。

美和 ホンマに自分の家戻る気ない？

哲也 そう言われても・・なあ。淳史もおるし。

美和 私、その家住んだろか？

哲也 いや、それはちょっと・・

あかり とりあえず、空いてる部屋はあるねんから、先の事は落ち着いてから決めたら？
美和 うん・・

啓太が入ってきた。

啓太 さっちゃん、ゴメン。今日発送する荷物の送り状って、どこ置いた？

さっちゃん え？荷物の上にありますか？

啓太 ないで？

さっちゃん えーっ・・

啓太とさっちゃん、出て行った。

哲也 ・・美和ちゃん、俺がこんなこと言える立場やないけど、いったん帰れ。

美和 え。

哲也 今日はしゃあないけど。

美和 なんで？

哲也 ちゃんと話し合ったんか？旦那さんと。

美和 返せない)

哲也 やっぱりな。

美和 けど、

哲也 家出るんやったら、ちゃんと話し合ってからでも遅ないと思うで。せやないと、

旦那さんも、お義母さんも、悲しいやろ。

美和 小さく数回頷く)

哲也 美和の背中を軽く2、3回叩いて・・しんどかったな。

美和、俯いた。

暗転。

場面転換中、日誌の音声流れる。

さっちゃん 十一月一日木曜日。八時から十七時まで事務作業。残業なし。今日のひとこと。新しいお札が届いた。一万円札が聖徳太子じゃないって不思議。夏目漱石はわかるけど、五千円の新渡戸稲造って、誰？

哲也 八月十二日月曜日。八時から二十時まで製品加工、配送。今日のひとこと。朝から飛行機墜落のニュース。なんでこんなことが起こってもうたんか。悲惨すぎて言葉もない。

友樹 四月一日水曜日。八時から十九時まで削り出しと溶接。今日のひとこと。駅行ったら国鉄の看板がJRになった。JR西日本。JR西日本とJR東日本の境目は名古屋か？思て時刻表見たら、名古屋はJR東海やった。

#2

4年後、夏。啓太とシュンがじゃんけんしてる。

啓太、シュン ジャンケンホイ、ホイ、ホイ、ホイ……

なかなか勝負がつかない。
作業場の方から慎人が現れる。

慎人 ・・何やってんねん。

シュン 見て分かりませんか。

啓太 ジャンケンです。ジャンケン。

慎人 なんでジャンケンしとんねん。

シュン 決まらないからです？

二人、手を止めて別れた。

慎人 なんか分からんけど、そろそろ手空いてる人だけで始めよか、言うてるで。

啓太 社長スイマセン、この決着だけついに行きますわ。

慎人 何の勝負や。

シュン 野球です。

慎人 高校野球か。

シュン 二人ともPLに賭けてるんですけど、このままやと同立一位なんで。

啓太 いくぞ。

シュン はい。

二人 ジャンケンホイ、ホイ、ホイ、ホイ……

なかなか勝負がつかない。

慎人 あー、もうキリがないわ。他のことで勝負せえ。

シユン 他のこと。

慎人 なんがあるやろ、ジャンケン以外で。

シユン 将棋にしますか。

啓太 お前、自分が得意やからって。

慎人 あほか、何時間かかる思とんねん。すぐ決着つくもんでや。

シユン すぐに決着。

啓太 相撲するか。

シユン 嫌ですよ、風呂入ったところやのに。

慎人 ほな腕相撲でええやろ。

啓太 腕相撲。

慎人 こないだ映画で見たんや。スタローンのやつ。あれでええやろ。

啓太 なるほど。

シユン 腕相撲ですか。

啓太 やめるんやったら今のうちやで。

シユン 僕はいいですよ。

二人、上着を脱いで腕を回したり。

慎人 ほなええか、二人とも。

二人、構えた。

慎人 レディー、ゴー！

なかなかいい勝負。

友樹が入ってきた。

友樹 ・・何してるんです？

慎人 後で説明する。

友樹 はあ。

勝負がついた。

啓太が勝ったようだ。

啓太 っしやあ！

シユン あー、くそっ！

啓太 春夏2連覇。PL様様や。

シユン そんな強かったら、阪神 セリーグから除名して代わりにPL入れたっただええのに。

友樹 社長。

慎人 ん？

友樹 ちよっと話あるんで、いいですか。

慎人 おお。・お前ら、勝負ついてんから早よ行け。

シユン はい。・啓太さん、

啓太 なんや。

シユン やっぱ将棋で決めませんか。

啓太 決めるか、あほ。

二人、食堂へ。慎人、友樹に座るように促す。

慎人 なんや、話つて。

友樹 ええ。・あの、言いくいんですけど、ここ辞めたいと思ひまして。

慎人 どうしてん。

友樹 俺の連れが、新しい工場作るから来えへんかって。

慎人 誘われたんか。

友樹 まあ。

慎人 新しい工場か。

友樹 中国です。

慎人 中国？

友樹 去年から急に円高になって、日本で作ったモンは、海外で売れんようになってます。

慎人 おお。輸出してるとこは厳しかったみたいやな。

友樹 それやったら逆に海外に工場建てて安く作ってまえ いうて、大手のメーカーが中国に土地買うてるらしいんですわ。人件費も安いし、コスト抑えられるし。けど技術指導できる人間がおらへん。せやから・・・

慎人 お前が行く、いうんか。

友樹 ・・今特に仕事に不満があるとか、そういうんやありません。たぶん、ここにおいたら、それなりにやっていける、とも思います。けど、・・こんなこと言うのはアレですけど、先が見えへんです。

慎人 どういう意味や。

友樹 ウチの機械、丈夫すぎるやないですか。普通の機械は十年、長くても十五年使えば寿命やのに、二十年以上精度落ちんと動いてるから、客は新しいのに買い替えてくれへん。このままやと景気が良うなっても、ウチはまったくおいてけぼりです。

慎人 親父の代で、売れそうなところには 一通り売ったからな。

友樹 聡志さんがおった時は、代理店通して海外で売っていかうか、みたいな話もあったんですけど・・・

慎人 こんなに円が高うなってもうたら、もう無理か。

友樹 俺もええ歳やし、新しいとこ行って、本気で勝負するんやったら、これが最後やと思うんです。

江藤がやってきた。二人の様子を見て声をかけそびれる。

慎人 ・・わかった。思ったようにしたらええ。

友樹 すんません。

慎人 江藤さん、いらっしやい。
江藤 こんにちは。・えっと、
友樹 失礼します。

友樹、食堂の方へ去った。

江藤 いいんですか？

慎人 かまへんよ。話終わったとこや。今日は何か？

江藤 ああ・オオタ商會が倒産したって知ってますか？

慎人 いいえ。えっ、オオタさんが？

江藤 永和さんは取り引きがあったんじゃないかと思っつて。

慎人 前はありましたけど、最近はほとんど・

江藤 じゃあ売掛金は、

慎人 ないと思います。

江藤 よかった。・あ、いや良くはないんですが。

慎人 そうですか・オオタ商會が・。あれですか、円高不況いう・

江藤 そうですね。輸出業を主にしていたので。

慎人 この一年ぐらいパタッと注文なくなってたんで、どうしてるんかなと思っつてたんですよ。まさか倒産って。・なんでこんな急に円が高くなってもうたんですかね。

江藤 プラザ合意です。

慎人 プラザ・なんですか、それ？

江藤 二年前に決められた政策です。世界経済で独り勝ちだった日本に、アメリカやヨーロッパが為替レートの調整を押し付けたんです。円高にして輸出の黒字を減らそうという目的で。

慎人 ええもん作って安く売ってんのに、叩かれるんですか。アホらしい。

哲也と淳史が外からやってくる。

哲也 ただいま。

慎人 おー、淳史、久しぶりやな。帰って来たんか。

淳史 去年戻れへんかったら怒られたから。

哲也 盆と正月ぐらいは戻ってくるもんや。

淳史 それは家があるヤツの話やろ。

哲也 家やったらここにあるやろ。

淳史 間借りやん。

哲也 お前はすぐそれや。ああ言えばこう言う。

淳史 下宿でバイトしてる方が気楽やわ。

慎人 淳史、学校どうや？

淳史 バイトばかりや。

慎人 今2回生か。

淳史 3回。来年就職や。

慎人 就職か。どうすんねん。

淳史 さあ。まだ何も考えてへん。

慎人 最悪どこもアカンかったらウチくるか？

淳史 無理や。

慎人 なんで？ お前、昔作文で「大きくなったら永和工業所の社長になります」て書いてたやろ。

淳史 目悪いから無理やって、小学生の時 お父さんに言われた。

慎人と江藤、哲也を見た。

哲也 ・・こいつ、えらい遠視で、ちょっと乱視も入ってな、

淳史 心配せんでも別の仕事するから大丈夫。

慎人 何するねん。

淳史 わからんけど、たぶん工場以外や。

慎人 ・・淳史、お前、酒飲めるか？

淳史 飲める。

慎人 奥でみんなおるわ。行っといで。

淳史、奥へ行った。

哲也 まあ、あんなもんや。

江藤 大人になったらわかりますよ。

哲也 期待せんと待っとくわ。・俺も飲んでこよかな。

あかりが現れた。

あかり あ、江藤さん、いらっしやい。

江藤 お邪魔してます。

あかり よかったら、飲んで行きはりますか？

江藤 え、いや、僕はちよっと寄っただけなんで。

慎人 遠慮せんと。

哲也 せや、よかったらこっち持ってくるで。

美和が外から帰ってきた。買い物してきた様子。

美和 ただいま。江藤に「こんにちは。

江藤 会釈

美和 淳史、帰って来たん。

哲也 おお。奥におるわ。

美和 あかりさん、これ、頼まれた分。

あかり ありがとう。

美和 あ、それと、さっき自治会長の・・なんていうたっけ、奥さんに会ってんけど、写真、見てくれた？」って。

慎人 写真？

美和 あかりさんに、お見合い写真。

江藤 お見合い。

あかり 結構です、言うたんですけど、見るだけ見たら、言うて押し付けられて・・・

美和 あのおぼちゃん強引やもんな。見たら返事ちょうだい、言うてたよ。

あかり 美和さん、見る？

美和 なんで私が見るんよ。もう当分懲りたわ。

あかり わかった。返事しとく。

江藤 なんて？

あかり え？

江藤 いや・・・なんて返事するのかな、と思って。

あかり あの・・・とりあえず、見てから考えないと、先方にも失礼ですから。

さっちゃんが、食堂から現れた。

さっちゃん すいません・・・あ、美和さん、よかった。料理全然足りなくて。

美和 わかった、すぐ出すわ。

美和、食堂へ。あかりも後をついて行くこうとする。

慎人 断れよ。

あかり・・・え？

慎人 見合い。今辞められたら人手足らんようになる。持ち株も、その・・・

あかり わかっています。どう言うて断ろうか、写真見て考えます、いう意味です。

慎人 せやったら、ええわ。

あかり、食堂へ去る。

さっちゃん なんですか、見合いって。

哲也 後でな。ビールもらうで。

哲也、食堂へ。

江藤 あの、僕もそろそろこれで。

さっちゃん えー、帰るんですか？

江藤 仕事ありますから。

さっちゃん 終わってから来てくださいよ。

江藤 いや、それはさすがに・・・

さっちゃん いいですよね、社長。

慎人 え、おお。ええよ。飲も飲も。

江藤 じゃあ、行けそうなら連絡します。

さっちゃん 来てくださいね。待っていますから。

曖昧に会釈しながら出て行こうとする江藤。ふと、振り返る。

さっちゃん 江藤さん？

江藤 いや、なんでも。・失礼します。

江藤、去った。

さっちゃん 社長。・行かないんですか。

慎人 ・ちよっと片付けてから行くわ。

さっちゃん あの、

慎人 ん？

さっちゃん トモさんのこと。

慎人 なんやアイツ、もう言うたんか。

さっちゃん ちゃんとは言うてませんけど。わかりますよ、有給の残りとか、退職金の

こととか聞かれたら。

慎人 ウチでは先が見えへんらしいわ。

さっちゃん え？

慎人 先やて。俺かて見えへんっちゅうねん。

さっちゃん ・待ってますね。

さっちゃん、食堂へ去った。

ややあつて、二人分のビールを持った哲也が食堂から現れる。

哲也 飲まへんのか。

慎人 飲む。

二人、ビールをかざして乾杯。

哲也 お前、あかりさんのこと、どうするつもりや。

慎人 単刀直入やな。

哲也 まわりくどいこと嫌いやねん。

慎人 どうするって。

哲也 聡志が死んでもう5年や。いつまでもこの工場に縛りつけるわけにもいかへん。

まだ若いうちに、自由にしてあげた方がええんとちやうか。

慎人 そんなこと、わかってる。けど・

哲也 ハッキリせえへん奴やなあ。

やや間。

哲也 美和ちゃんな、今みたいない手伝いやなくて、あかりさんの仕事引き継ぎたい、言うてるねん。

慎人 美和が？

哲也 マサと一緒にこの工場継ぐって。お前も兄妹でやるほうが気兼ねせんでええやろ。

慎人 まあ、そらその方がええかも知れんけど・・・

哲也 まだ言わんといて欲しいねんけど、淳史が卒業したら、一緒に住もう思て。

慎人 誰が？

哲也 俺と美和ちゃん。

慎人 えっ！

哲也 しーっ、声が大きい。

慎人 ・・すまん。

哲也 まだ先やけどな。

慎人 ・・アイツ、懲りたんとちやうんか。お前も。

哲也 懲りたよ。二人とも懲りてるから、まあ、よく話し合ったというか。

慎人 なんやねん、それ。

哲也 俺はハッキリしたぞ。

慎人 ハッキリしすぎや。

哲也 せやから工場のことには気にせんでええ、いうことや。

慎人 ・・違うねん。

哲也 なにが。

慎人 朝起きたら、あかりさん、絶対仏壇の前におんねん。静かに手合わせて、目瞑って、ずーっと。俺が起きてきたのに気いついて、それでメシ出してくれて。毎日。

兄貴と喋ってるんやろうなああって思う。なに喋ることあるんか、全然わからんけど、そんなん見てたら、ああ、敵わんなあって。この人の中に兄貴おるやん、って。

毎日いっぱい喋ってるやん、って。せやから・・・

哲也、食堂の方へ。

哲也 落ち着いたら、顔出せよ。

慎人、ビールをあおった。

音楽。

食堂の方から、社員たちが皆、騒ぎながら事務所へなだれこんでくる。

どうやら腕相撲の決着を啓太と友樹がつけるようだ。

勝負する二人、勝敗が決まる。

まわりにけしかけられて、哲也が淳史と勝負をする。

いい勝負だが、淳史が負ける。

慎人も駆り出される。女性たちも勝負を振られるが、腕相撲は無理。

と、あかりが指すもうなら、と提案し、慎人は あかりと指すもうをする。

押さえ込まれて負ける慎人。

まわりでは同じように指すもうや、腕相撲をする人たち。

勝負がついて、笑ったり、悔しがったりしながら。

暗転。

場面転換中、日誌の音声が流れる。

慎人 九月一日火曜日。八時から二十時まで現調と得意先まわり。機械がちよつとずつ売れ始めてる。取引先の羽振りも気持ち、良くなった気がする。今日行った得意先は、株やったり土地動かしたりして本業以外のところで儲け出ししてる言うてた。俺に株せえ、言うてたけど、今は増えた注文こなすだけで精一杯や。

シユン 一月七日土曜日。七時から設備点検、十九時まで。昭和が終わった。年末から続いた自粛ムードも終わるかな？二つの元号をまたぐ感覚ってへんな感じ。新しい元号は平成、言うらしい。へーせて、なんか軽くて しっくり けえへん。もつとええのん なかったんかな。

啓太 四月三日月曜日。八時から二十二時まで加工作业。消費税始まってもうた。何もかも三%余分に払うってもう、ハラ立って気い狂いそうや。仕分けも面倒やし、原価計算 全部やり直さなアカン。現実問題としてみんな、全部の得意先に三%上乘せした金額って請求できるんやろか。相手によって 消費税分負けろ」言われたら断られへんのとちやうんかなあ。

#3

6年後。冬。

原稿をチェックしているさっちゃん。傍にはスーツを着た淳史がいる。

淳史 どうかな？

さっちゃん 大丈夫。進めてくれていいよ。

淳史 じゃあ出来上がったら、直接送るわ。

さっちゃん どれくらいかかりそう？

淳史 加工もあるから・・・一週間ぐらいかな。

さっちゃん わかった。

淳史 少しあらたまって頭を下げた) よろしく願います。

さっちゃん いえいえ。・・・ぜんざい、食べる？

淳史 え、

さっちゃん 節分の。恵方巻はお昼に食べてしまったから、もうないけど。

淳史 懐かしいな。・・・節分に ぜんざいて。

さっちゃん なに。

淳史 ウチだけやろ。厄年の人が ぜんざい作って配ったら、食べた人がちよつとずつその人の厄をもらってくれる、って。どこの風習なん。ほかの人に言うても、そんなことしてるとこ、どこもなかったよ。

さっちゃん さあ、どこの風習やろ。この会社では慎人さんのお祖父さんの代からずつとそうしてきて、私も それが当たり前やったから・・・

電話、内線が鳴った。さっちゃん、出る。

さっちゃん はい。あ、あかりさん。何か。・え？ 江藤さんが？ いえ、こっちは、来てませんけど。・そうですか。わかりました。見かけたら知らせます。あの、社長は。・そうですか。遅くなるんですね。ほんならカギ。・そうですか。じゃあお願いします。

淳史 江藤さん、どうかしたん？

さっちゃん なんか一週間以上 無断欠勤で、会社来てないんやつて。

淳史 江藤さんが？

さっちゃん とりあえず、社長が心当たりを探してみるって。・どうしたんやろうね。

残業を終えた啓太が作業服姿で入ってくる。

啓太 お疲れー。

さっちゃん お疲れさまー。

淳史 お疲れ様です。

啓太 あれ、淳史、来てたん。・なに、仕事？

淳史 はい、版下確認してもらいに。

さっちゃん 伝票と名刺、淳史くんとここで作ってもらったことになってん。

啓太 なーんか、すっかり一丁前やん。

淳史 そんな、まだまだ。・

啓太 どうや、仕事は？ バブルはじけたいうても、まだマシか？

淳史 いえ、全然ですよ。印刷費とかデザイン費なんて、真っ先にコスト削られますから。

啓太 俺らもそうやで。機械とか設備投資なんか景気ようなくても 受注増えるのは最後の最後やのに、ちよっと悪うなると、真っ先に買い控えられるからなあ。バブルとか全然関係ないまま終わったわ。

淳史 けど、残業してるやないですか。

啓太 これはアレや。ヨソがつぶれたから、その仕事がまわって来てんねん。他にやってくれるとこないくせに、安うあげようとして買いたいてきよる。納期キツイ、工賃安い、品質うるさい 三拍子そろってんで。

淳史 あ、それウチもそう。

啓太 最近、こんなんばかりでイヤになるわ。

作業服姿の美和が入ってきた。美和のお腹は少し大きい。

美和 お疲れー。あ、淳史。

淳史 お疲れ様。

美和 仕事？

淳史 うん、まあ。・

美和 お父さんも、もうあがってくるわ。ウチ、寄って行くやろ？

淳史 いや、ちよっと、

美和 まだ仕事？

淳史 うん。・大丈夫なん？

美和 何が？

淳史 ようわからんけど、妊娠中は火見たらアカンって言うやん。

美和 ああ、火事見たら顔にアザができるとか。あんなん、ただの迷信やって。

淳史 そうなん？

美和 火見られへんかったら料理もできへんわ。

淳史 そうか。

美和 それに、溶接の時に見てるのは火事やなくて火花やもん。ウチのお母さんも、

淳史のおばあちゃんも、お腹大きい時に溶接してたけど、なんともなかってんから。

大丈夫やって。

淳史 え？ おばあちゃん溶接できんの？

美和 昔は家族全員やらされたって聞いたで。会社立ち上げた頃、ベルトのバックルと

か小さい部品をな。

淳史 へー。

シユンが奥から出てきた。

シユン お先に失礼します。

さっちゃん ぜんざい食べた？

シユン 残業の前にはいただきました。美味しかったです。去ろうとして

啓太 ・おい待てや。

シユン 何ですか？

啓太 お前、何帰っとんねん。

シユン 帰りますよ。今日はもうやることないんですから。

啓太 ・明日は出て来るんか。

シユン やや間) 出て来ても材料なかったら意味ないですやん。

啓太 どうすんねん、間に合うんか、納期。

シユン なんとかやりますよ。

啓太 お前、またギリギリやないか。

シユン ・・しょうがないでしょ。鋳物が入れへんねんから。

啓太 鋳物が入れへんのは、お前の発注が遅いからやる。削り出しに十日かかるって判

ってんのに、なんで間に合うように頼まれへんねん。

さっちゃん 啓太さん、もうそれぐらいで・・

啓太 ごめん、さっちゃん。けどシユン、お前何回目や。俺言うたよな、余裕みて頼ん

どけて。しわ寄せくるんはこっちやねんぞ。

シユン ・・すんません。

啓太 他の納期も全部詰まっとんねん。自分で自分の首絞めるようなことすんな。

哲也が入ってきた。

哲也 おつかれ。・・なんやシユン、まだおったんか。早よ行かな間に合わんぞ。

シユン　・失礼します。

シユン、去った。

美和　シユンくん、どうしたん？

哲也　なんか、奥さんの具合が悪いから、代わりに子供迎えに行くって。

美和　最近、遅刻とか早退とか多いなと思ってたけど、そうやったんや。

さっちゃん　シユンくんの奥さん、身体弱いし、子供まだ小さいし、シユンくんも仕事あるし、しんどいって言うてました。

哲也　でもまあ放っておくわけにもいかんしな。

美和　アンタが言うんや。

哲也　俺は放つといたから逃げられたんやがな。

美和　そら逃げるよ。

哲也　啓太に）せやから　まあ、帰れるうちは早く帰れ、言うてるねん。お互いさまや。な。

啓太　何度か小さく頷く

哲也　・淳史、来てたんやな。

淳史　うん。でも会社戻らんと。

哲也　そうか。・お、甘い臭いしてるな。ぜんざいか。

さっちゃん　明日、節分やから。

哲也　今年は誰が厄年や？

さっちゃん　・私です。

哲也　そうか、さっちゃん厄年か。

美和　もう、言うたやろ。ごめんな、さっちゃん。

さっちゃん　いえ。

哲也　みんな、食べたんか。　啓太は？

啓太　いえまだ・・

哲也　ほな早よ行って食べ。厄はみんな分けたら小さくなる。なあ。

啓太　専務。

哲也　なんや。

啓太　専務からも社長にお願いしてもらえませんか。鑿（タガネ）は型紙もろたら、どうしても3日はかかります。なんぼ売りたいからって中一日の納期を二つ返事で受けられたら、俺ら残業代も出えへんのに何時間も仕事せなアカン。こんなん続いたら、身い持ちませんよ。

哲也　わかってる。けど今、あっちこっちで会社潰れてるからちよつと無理してでも、

そのの仕事取って、得意先の数　増やしときたいんや。

啓太　それは解ってます。ただ、納期がないと、こっちも　ちゃんとした製品が作れま
せん。

哲也　・・わかった。納期は交渉してもらおうように俺からも、よう言うとかくから。な。
もうちよつと待ってくれ。

啓太　お願いします。

啓太、去った。

さっちゃん 啓太さん、お餅入れるわ・

さっちゃん、追いかけて去った。

哲也 すまんかったな、へんなどこ見せて。

淳史 ええよ、別に。今はどこも大変やし。もっとへんなこと、いっぱい見てきたし。

哲也 ・・そらそうやな。

淳史 けど、思い出したわ。

哲也 なにを。

淳史 そう言えば お父さん、家で 「んどのい」て言わへんかったな、って。

哲也 え？

淳史 仕事忙しくて、毎日帰ってきて寝てるだけやったけど、仕事しんどいって言うの
一回も聞いたことなかったな、と思つて。

哲也 そうやったか。

淳史 就職してわかったわ。仕事、めっちゃしんどかった。ノルマあるし、どこもなかなか注文くれへんし。・・けどお父さんは、家で 「んどのい」って言の聞いたことない
なと思つて。・・それって凄いなと思つて。

哲也 アホ、褒めても何も出へんぞ。

淳史 知ってるよ、そんなん。・・でもちよつと、尊敬した。

哲也 ・・ぜんざい、食うていくか。

淳史 うん。

3人、食堂の方へ去る。

数時間後。誰もいない事務所。

電話が鳴り、あかりが現れた。

あかり はい、永和工業所・・お疲れ様です。はい・・そうですか。・・ええ、もうみんな帰りました。・・はい。・・わかりました。・・そうですね。じゃあ慎人さんも、気を付けて。

あかり、電話を切った。やや間。

切り替えるように頭を振り、施錠をしようとして出入り口に向かう。

江藤が現れた。少しやつれた様子。

江藤 ・・こんばんは。

あかり 江藤さん。

江藤 すみません、こんな時間に。外から見るだけ、と思つたんですけど、電気が点いていたので、つい・・

あかり どうぞ。

江藤、足元がおぼつかない。
あかり、思わず駆け寄って支える。

江藤 ・すみません。
あかり 寒いですか。

あかり、江藤を座らせると、自分の席の膝掛を取り、江藤に掛けてやる。

あかり ちょっと待っててください。

あかり、食堂の方へ去った。
残された江藤、しばらく身を縮めて寒さに耐えているが、次第に羽織っていた膝掛に顔を埋める。しばらく。
やがて身を起こし、出口に向かう。が、足がもつれて転んでしまった。
物音に気づいて、あかりが戻ってくる。

あかり 江藤さん、
江藤 すみません。帰ります。

あかり 危ないです。そんな酔って。ケガでもしたら、
江藤 いいんです。僕なんか・

あかり、江藤を強引に連れ戻すと、座らせた。

あかり どうしはったんです。
江藤 お客さんが・貸し剥がしにあって・
あかり 信金さんが？

江藤 ウチじゃありません。都銀が・バブルがはじけて、返済のスケジュールが組み直されて、でもその都銀だけ 自分のところの分を先に返済しないと、信用保証協会分の再調整に応じないと言ったらしくて・

あかり 返済しはったんですか？

江藤 ええ。半ば脅しみたいに迫られて、仕方なく。
あかり けど、そんなことしたら、

江藤 額く）・それを知った途端、その会社に貸している他の金融機関がみんな、返済スケジュールの変更を認めないと云いだしたんです。

あかり 江藤さんのところも？

江藤 額く）社長に泣きつかれて、僕も何とかしたいと思って相談のってました。もう一度短期でいいから その都銀に再融資してもらって、他の返済先を説得してくださって。でも、何度交渉しても決まらなくて。それどころか交渉のたびに融資金額が減らされていって・

あかり 借りられへんかったんですか。

江藤 ・電話がありました。もう終わりや。会社も、全部。下請けに支払いどころか、

社員に給料もはらえない」って。・聞いててぞっとするぐらい、落ち着いた声でした。凄く悲しかったし、残念でした。・でも、その時、僕はわからなかったんです。何日か経って、警察がウチの銀行に来ました。その社長は、海で・亡くなりました。

あかり 自殺・・・ですか？

江藤 わかりません。事故か、自殺か。僕はあの時 確かに声を聞きました。でも、わかりませんでした。会社が潰れるとか、人が死ぬとか、そんなこと、もう、当たり前すぎて。多すぎて・・・

あかり 江藤さん。

あかり、江藤に手を伸ばす。

江藤 やめてください。

あかり、躊躇したが、江藤に触れる。

江藤、あかりを抱きしめた。

江藤 すみません・・・すみません・・・

あかり、江藤の頭をやさしく撫でる。
やや間。

慎人が現れた。

慎人 ・なにしてんねん・・・

二人、慎人に気づき離れる。慎人、江藤の胸倉をつかんで拳を振り上げた。
あかり、慎人にすがりつく。

あかり やめて！・・・江藤さん、酔ってて、それで・・・話聞いてて・・・冗談やねん。冗談・・・せやから・・・

慎人、江藤を放した。

江藤 冗談じゃないです。

慎人、ふたたび江藤を掴むと頭突きした。

あかり 慎人くん！

二人とも 痛い。

あかり 江藤さん、お客さんが亡くなって、それで・・・
慎人 水！

あかり え？

慎人 水、二つ持って来てくれ。

あかり、去る。

慎人 ・人が心配して探し回ってる時に、お前は・

江藤 ハッキリしないからですよ。

慎人 はあ？

江藤 いつまでも、あなたが。

慎人 ・なに言う тоннねん。

あかり、コップに水を二つ持ってきた。

あかり 慎人くん、お水。

慎人、コップを取ると、江藤の顔に水を浴びせた。

あかり 慎人くん！ ちょっと何やってんの！

慎人、腰に提げていたタオルを江藤に投げ、もう一杯のコップを取って差し出した。

慎人 頭冷やせ。ほら。

慎人、引きずるように江藤を座らせると、自分も横に座った。

慎人 あかりさん、お茶頼むわ。熱いの。

あかり でも、

慎人 大丈夫や。もうかけへん。

あかり、ふたたび奥へ。

慎人 ・だいたいのは信金で聞いた。キツイ話やな。

江藤 すみません。御心配をおかけして。

慎人 一週間も何やってん。

江藤 ・亡くなった社長の家に行きました。でも、会ってもらえませんでした。・そのまま帰ろうとしたら、偶然ですけど、近くで機械を運び出してる工場が見えました。

慎人 その社長の、

江藤 いえ、別の。全然知らない会社です。でも近所の人が「気の毒になあ」と言うのが聞こえました。倒産して、全部手離すんでしょうね。虚ろな顔で、機械が吊り上げられるのを従業員の人たちが見てて・なんかもう、全部嫌になって、気が付いたら・

慎人 ・・辞めるんか？

江藤 何度か小さく頷いた。たぶん。

慎人 そうか。

江藤 すみません。今までずっと良くしていただいたのに、こんな形で。

慎人 いや・・まあ、しゃあないやろ。

江藤 思ったより、向いてませんでした。

慎人 せやな。

江藤、俯いた。と、慎人、江藤の頭を自分の方へ抱き寄せる。

江藤 ・・なにしてるんですか。

慎人 なぐさめてるんや。

江藤 やめてください。

慎人 辛いやろ。遠慮すんな。

江藤 遠慮します。

慎人 けど、お前、放つといたらまた あかりさんに手え出すやろ。

江藤 だからそれは、・・すみません。

慎人 もうせえへん言うまで こうしたる。

江藤 勘弁してください。もうしません。

慎人 絶対か。

江藤 絶対です・・っていうか、マジで離してください。さっきのやわらかい感触がゴツゴツしたもんに上書きされて、もう・・

慎人 そうか、上書きされるか。

江藤 あー、やめてください、マジで。固い。臭い。

慎人 臭いまで言う？

江藤 臭いです。油と、汗と、なんか・・ピータンみたいな

慎人 ピータン。なんやねん、ピータンで。

江藤 知りませんか、アヒルの卵を発酵させた、中華料理の、

慎人 知ってるわ、けど そんなもん、食うたことない！

などと言い合っていると、あかりがお茶をのせた盆を手に戻ってきた。

あかり あの・・お茶、どうぞ。

江藤と慎人、身体を離し、あかりに曖昧な笑顔を向けた。

江藤 いただきます。

江藤と慎人、お茶をすする。

慎人 そうや。ちょっと待っててや。

慎人、作業場の方へ出て行った。

江藤 ・さつきはすみませんでした。

あかり いえ。

江藤 でも僕、

あかり さえぎるように) 酔って、

江藤 え。

あかり 酔ってたんですよね。

江藤 ・ええ。酔ってたみたいです。

慎人、部品を手に戻ってきた。

慎人 そういえば、あの後、ちゃんと見せたことなかったなと思って。

江藤 ・嵌合。

江藤、力を入れて引っ張ったが動かない。

江藤 ビクともしない。

慎人 もう叩いて入れることもせえへん。穴の上に削り出した部品を置いておくだけや。

そしたら夜のうちに部品自体が自分の重さでズウズウ入って行って、朝になったらカ

ツチリ ハマってる。もう、ちよつとやそつとでは抜けへん。

江藤 置いておくだけで。

慎人 頑張ったやろ。

江藤 ええ。

慎人 あの時、江藤さんが貸してくれたおかげや。他の人はわからんけど。俺はアンタに助けてもらって、こうやって商売ができてる。それは覚ええといてな。

江藤 ・昔見せてもらった スーッと抜ける嵌合が嘘みたいですね。

二人、少し笑った。

溶暗。

場面転換中、日誌の音声流れる。

美和 一月十七日火曜日。早朝ドン、と下から突き上げられたかと思うと、経験したことのナイ長く激しい揺れが続いた。ニュースを見たら神戸は震度「4」だったという。ウチの従業員はみんな無事だったけど、長田や尼崎の得意先が心配。

慎人 三月二十日月曜日。八時から十八時まで加工作業と事務処理。今朝、東京の地下鉄で毒ガス？が撒かれるという信じられないニュースを聞く。なんでそんなもんが？よくわからない。

さっちゃん 八月三十日水曜日。八時から十七時まで事務作業。ひょう銀が潰れたらし

い。銀行って潰れるんやとビックリした。銀行って、二年ぐらい前から合併して名前が長くなったり、へんな名前になったりして、ずっとややこしい。

4

さらに4年後。秋。

さっちゃんと哲也が売掛金を確認している。

さっちゃん ・三百五十六万、二百四十八万、四百二十七万、百六十九万・・・ですね。
哲也 千二百万か。

さっちゃん それに九月の分が二百三十万で、合わせて千四百三十万です。

哲也 千四百三十。

さっちゃん これ、回収できへんかったら・・・

哲也 ヤバいなあ。・社長は？

さっちゃん カワサキさんへ確認に行ってます。

哲也 ・江藤さんのコンサル会社って番号わかるか？

さっちゃん 各刺を渡して。これです。

哲也、電話をかける。

さっちゃん 私もさっき かけたんですけど、繋がらなくて・・・

哲也 ・もしもし。・留守番電話のようだ。あー、永和工業所の竹原です。留守電聞かれましたら、お電話ください。よろしくどうぞ。切る

シュンが外から入ってきた。作業服が永和工業所のものとは違う。

シュン まいど。

さっちゃん いらっしやい。

シュン これ、型紙と注文書です。それと、また新しいブランドの分のタガネを作りたいんで見積頼みたいんですけど。

さっちゃん ありがとうございます。

シュン ・どうか したんですか？

さっちゃん 答えない

哲也 見積もりか。

シュン ええ、お願いします。

哲也 なんか、変な感じやな。

シュン 僕もですよ。

哲也 どうや、もう慣れたか？

シュン まあ ぼちぼち。・いや、こっちはこっちで わからんことだらけです。まあ、それが面白いといえれば面白いんですけど。

哲也 そうか。

シュン すんません。まだ入ったばかりなんで、回せる仕事が小さいモンばかりで。哲也 そんな全然かまへんよ。こっちこそ、スマンかったな。

シユン いえ・

さっちゃん、お茶を出した。

さっちゃん どうぞ。

シユン ・なんか あったんですか？

さっちゃん え？

シユン いや、専務もさっちゃんも、元気ないっていうか。

哲也 お前聞いてへんか？

シユン 何をです？

哲也 カワサキさんがな、・潰れたんや。

シユン えっ・ええっ！

哲也 今朝 F A X が来ててな、倒産しましたって。

シユン えー・。どうするんですか。

哲也 まだわからん。まあ、どうにかせなアカンねんけど。

シユン そうですか・。

慎人が現れた。

慎人 ただいま。おー、シユン、

シユン こんにちは。

慎人 どうや、新しい会社は、

シユン 毎日勉強させてもらってます。

慎人 そうか。

シユン あの、カワサキが潰れたって・。

慎人 なんや、知ってんのか。

シユン ええ、今 聞いてビックリしてたところです。

慎人 そうやねん。

哲也 それで、どうやった？

慎人 アカン。誰もおらへん。貼り紙だけで中も入られへん。告示書いうんか、初めて

見たわ。破産手続きの準備に入りました」って。

哲也 商品は？ 回収できそうか？

慎人 わからん。代理人弁護士いうんが管財人になって、勝手に入ったり、商品持ち

出したら刑事責任とか書いてあった。

哲也 まあ普通そうやろうな。

慎人 会社更生とか民事再生とかやったら 回収の道もあると思っただんやけど・。

やや間。

シユン あの、僕、今日はこれで・。

慎人 おお、すまん。シユン、

慎人、シュンの前に立ちふさがった。

慎人 ウチは大丈夫やから。

シュン ……はい。…いやでもカワサキさんでしょ？まだ取引、かなりありますよね？

慎人 そうやけど。大丈夫やから。せやからへんな報告せんといってくれ。…頼むわ。

シュン ……わかつてます。

友樹が入り口に現れた。

友樹 こんにちは。

さっちゃん トモさん！

友樹 お久しぶりです。

哲也 おー、久しぶりやな。なんや今日は、同窓会やないか。

シュン おひさしぶりです。

友樹 おー、シュン、元気やったか。

シュン おかげさまで。

慎人 とりあえず座れ、座れ。

友樹 お邪魔します。

友樹、座った。

友樹 シュン、…なんか雰囲気変わったな。

シュン 転職したんです。

友樹 転職。

慎人 ちょっとまあ、資金繰りの条件で いろいろあってな、どうしても従業員を減ら

さなアカンことになって。

シュン 依願退職したんです。

友樹 自分から。

シュン 営業回ってる時に、小西工芸さんと人が人手を探してるって聞いて。まあ、僕

が小西さんところに行ったら、永和にも仕事出しやすくなるじゃないですか。

友樹 お前、それで？

シュン 正直、営業に変わって、時間の融通がきくというか、条件も ちょっと良くなり
ましたし。

慎人 トモ、お前の方はどうやねん。今も中国で技術指導か？

友樹 いえ、そこは辞めました。中国とか、韓国もやな、もう、ものすごい勢いで技術

吸収してて、五年もたたんうちに 教えることが無くなったんです。今は日本に戻っ

てきて、CADのシステム売ってます。

慎人 CAD。

友樹 今、工作機械は中国とか東アジアの製品が日本製に取って換わってきてるでしょ。

たぶんこれからは生産自体がもっと海外に移りますよ。

慎人 確かにな。ウチの機械と同じことができる機械が、台湾からドンドン入ってるわ。

値段聞いたら半分ぐらいや。安かろう悪かろう ちゃうんか思ってたけど、これがま

た・・・ええねん。参ったで。こら勝ち目ないなと思たわ。

友樹 コンピューターの精度がびっくりするぐらい上がってますからね。職人の技術がなくても、たいていのことは機械が勝手にやってくれるようになってます。

哲也 CADで専用機やる。まだ一千万ぐらいするて聞いたで。

友樹 いや、もうパソコンのソフトが出てるんで、一式買うても百万ぐらいで揃いますよ。

哲也 十分の二か。

友樹 今日は挨拶も兼ねて宣伝しに来たんです。永和も型紙の図面ひくのに、CAD使えへんかな、思て。

友樹、名刺とカタログを渡した。

慎人 ありがとうございます。・・・そうか、なんかアレやな。時代の波ってやつやな。

友樹 永和も続けようと思ったら、新しくしていかなアカンでしょ。

慎人 まあな。

友樹 シュンとこも、製造やったら絶対そのうち必要になるやる。安うしとくから検討してや。

シュン ありがとうございます。・・・ほな、僕、行きますわ。

友樹 あ、じゃあ俺も。

哲也 なんや、もう行くんか。

友樹 今日はホンマにちよつと寄らせてもらっただけなんで。・・・また検討する気になったら電話ください。

慎人 わかった。ありがとうございます。

シュンと友樹、出口へ。

シュン 失礼します。

友樹 失礼します。

シュン・・・トモさん、よかったら送って行きますよ。

友樹 ホンマに？ 助かるわ・・・

二人、去った。

慎人 コンピューターか・・・

哲也 どないする、これから。

慎人 え？

哲也 カワサキが潰れて。このままやとウチも連鎖倒産やで。

美和が作業場から現れる。

美和 今日出荷のタガネ、20φ（ファイ）の分がないねんけど、どこにあるか知らんかな。

哲也 台の上に置いてないか？
美和 ないから聞いてるんやん。
哲也 えー？

哲也、作業場へ行った。

美和 なあ、啓太さん、連絡つくかな？

さっちゃん 電話かけてみた。あー、つながりませんねー。

慎人 え、啓太おらんのか？

さっちゃん ええ。朝早く出勤したと思ったら、すぐ出て行って。

慎人 どこに。

さっちゃん さあ・・・ちよつと出てくるから、後頼みます」って、何も言わんと。

美和 出て行くなら電源入れたいわ。

さっちゃん 私も一緒に探してみます。タガネですよね？

美和 20φ。これぐらいのやつやと思う。

さっちゃんは作業場へ。

美和 みんな、今日は朝から落ち着かへんなあ。

慎人 カワサキのことで不安になってんねんやろ。

美和 まあね。

慎人 お前は落ち着いてんな。

美和 一回潰れてるからね。前の旦那のこと。

慎人 おお・・・そうやった。

美和 とはいえ、ウチが あんなことになるんは御免こうむりたいなあ。

慎人 そんなん、俺かてそうやわ。

美和 会社なくなるって、人が死ぬぐらいには大変やもんな。

慎人 え？

美和 変な話やけど、ちよつと似てるなと思って。意外とあっさりしてるけど、手続き

とか面倒やし。関わった人との間に消えへん何かが残ってしまうところとか。

慎人 そんなもんか。

美和 うん。

美和 潰れそうになったら、早めにお金、こっそり移しときや。あ、大金はアカンで。

ちよつとずつ分散させて、後で回収できるようにした方がいいよ。それと保険は全部没収されるから積み立てとかあったら、さっさと解約しいや。それと、

慎人 待って待って・・・まだ潰れると決まったワケやない。

美和 ごめんごめん。

慎人 とりあえず、また取引先に片っ端から電話してみよか。

美和 なんて？

慎人 いや、仕事ありませんか、って。

美和 ……。

慎人 黙って待ってても 気が滅入るだけや。頭と手、動かしてる方がマシやろ。

慎人、資料を取り出す。

見ていた美和も立ち上がって、慎人の前の資料を半分取った。

美和 ナ行から かけるわ。

慎人 え？

美和 頭と手、動かしてる方がマシやし。

さっちゃんが作業場から現れた。

さっちゃん すみません、

美和 あ、見つけた？

さっちゃん それが・・・2つあって。

美和 ふたつ？

さっちゃん 大きさがちよつと違うのが2つ。テツさんも どっちか わからへんって。

美和 もうー、行くわ。

美和と さっちゃん、作業場に去った。

慎人は電話帳を開き、話すことをブツブツと考えている。

と、買い物帰りらしく、荷物を持った あかりが、外から現れた。

あかり ただいま。

慎人 おかえり。

あかり どうでした、カワサキさん。

慎人 ・・破産やったわ。

あかり そうですか。・・あの、ちよつといいですか。

慎人 ん？

あかり、荷物を置いて、カバンから通帳を出した。

あかり これ、よかったら使ってください。

慎人、無言で通帳を押し戻す。あかり、さらに押し戻す。

二人で通帳の押し合いになる。

慎人 なんやこれ、もうええわ！

あかり 使ってください。

慎人 あかりさん、このやりとり 何回目や。会社傾きそうになるたびに、兄貴の金出してくるのやめてくれ。

あかり だって、慎人くん 全然受け取ってくれへんし。

慎人 いらんから いらん、言うてるねん。

あかり だって カワサキ、潰れたんでしょ。

慎人 まだ どうかになる。

あかり ならへんよ、どうにも。毎月一千万以上 売掛あるのに、

慎人 売掛あっても、これには手えつけへん。

あかり 使って欲しいの。

慎人 それ使うぐらいやったら、会社辞める。

あかり ・・・慎人くん。

慎人 ・何べん言うたら わかるねん。その金使ったところで、その時は良くても ましたすぐ 立ち行かんようになる。焼け石に水や。そうなたら あかりさんの将来のこと想って その金残した兄貴の気持ちが無駄になる。そんなことになったら、俺は兄貴に顔向けできへん。せやからこの工場は、俺が自分でどうにか やっていかなアカン場所やねん。

あかり お金足りなくなつて潰れても？

慎人 それで潰れるんやったら、俺がそれまでやったって だけのことやろ。

あかり 私は？

慎人 え？

あかり なに、私の将来って。・・このお金使わんと、工場なくなって、それやのに生きていかなアカン私の将来って何？

慎人 あかりさん・・

あかり もう遅いねん。ここまで関わってしまった。初めは見守るつもりだけやったのに、慎人くんが、みんなが、毎日必死で働いてる姿を見てたら、私もこの工場と一緒に生きてみようって いつのまにか ・・せやから・・

あかり、通帳を慎人の手に握らせた。

あかり 使っていいねん。このお金も、私の将来も。

慎人、あかりの手を握り返す。ややあつて、電話が鳴った。

作業場の戸が開き、さっちゃんが受話器を取る。

さっちゃんの後ろには、美和と哲也。

さっちゃん はい、永和工業所・・。あかりさん、なんか、病院から・・

あかり 上で取るわ。

あかりは そのまま住居の方へ去る。

哲也 ごめん。納品するほう、思ったより すぐわかってん。

美和 資料の方に戻りながら）ナ行からやんな。

慎人 お前ら、どこから聞いててん。

だれも口ごもってボソボソ言うだけで、ちゃんと答えない。

慎人、あきらめて通帳を美和に握らせた。

慎人 これ、持って上がって、あかりさんに返してくれ。

美和 え？

慎人 頼む。

美和 でも あかりさん・・・

慎人 嬉しかった。まだ信じられへんぐらい。

美和 せやったら

慎人 だから、受け取らへん。まだやれること 全部やってへん。それ貸してくれ、って泣きつくくんは、最後の最後や。せやないと 俺は自分で自分が 許せんようになる。

やや間。

哲也 ・・持って行ったり。

美和、通帳とあかりの荷物を持って、住居の方へあがって行った。

さっちゃん コーヒー、淹れましょか。

哲也 ありがとう。頼むわ。

さっちゃん、給湯場へ。

外から啓太と江藤が現れた。

啓太 お疲れ様です。

江藤 失礼します。

哲也 江藤さん、ちょうどよかった。電話してたんですよ。

江藤 知ってます。そのために行ってきたんです。

哲也 行ってきた、って、

江藤 カワサキの件でしょう。

哲也 ええまあ。

江藤、封筒から書類を出し、哲也に渡した。

哲也 これは？

啓太 借用书がわりの製品リストです。・・ふんどつてきました。

哲也 え？

江藤 今朝、啓太さんがウチの事務所に来ました。

慎人 事務所って、コンサルの？

江藤 ええ。えらい剣幕で ぞうしたら潰れんと済みますか」って怒鳴りこんできて。ビックリした受付の子が警備員呼んで。大騒ぎで。なあ。

啓太 いや、それはホンマ、すんません。ご迷惑をおかけしました。

慎人 それで？

啓太 え？

慎人 どないしてん。行ってんやろ。

江藤 ああ．．．それですぐ、二人でカワサキの社長のところへ行ったんです。

慎人 直接行ったんか。

啓太 はい。江藤さんは、管財人を通して分割で回収、とか、強制執行の手続きとか、いろいろ提案してくれたんですけど、そんなん、弁護士に頼んで手続きして．．．って
なったら ウチの会社がそれまで持たへんやないですか。

慎人 それで、おったんか 社長は？

啓太 はい。ちょうど家出て行こうとしたところを捕まえて、お前ちよう待て、言うて
家にあがらせてもらって。

慎人 無茶すんなあ。

啓太 江藤を指して この人の方がヒドイですよ。車のキー取り上げて、 ぞうにか頼
みます」言うて。

江藤 違うって。

啓太 いや、違わんでしょ。

江藤 そりゃ、キーは取ったけど．．．

啓太 取ってるやないですか。

江藤 先方も永和さんとは三十年近く取引のあった会社だし。そんなことしなくても
話は聞いてくれましたって。

慎人 それで、．．．なんぼ払ってくれそうなんや。

江藤 はじめは、倒産前に資金は動かせないの一点張りでした。実際、振り込みで現金
を動かすと、偏頗（へんぱ）弁済と行って 不公平なことをしていると見なされて、
裁判所から差し戻されるかも知れません。

啓太 それで、まだ棚卸してないカワサキが持ってる部品の．．．紙を指して このリス
トの商品を永和の在庫として帳簿を書き換えてもらいました。

江藤 これをカワサキの得意先2社に売れば、売上分は、回収できます。．．．三か月の手
形ですが。

啓太 部品を引き取る話はカワサキの社長が目の前で得意先に電話してくれました。話
はついてます。

慎人 いくらぐらいや。

江藤 約七百万です。

慎人 七百か。

江藤 元の売掛には到底足りませんが、これが限界かと。

慎人 ．．．いや、ようやくってくれた。とりあえず それだけ戻ってくれば、何とか首の
皮一枚つながると思う。啓太、江藤さん．．．この通りや。ありがとう。

江藤 いえ。

啓太 頭あげてください。会社なくなったら困るのは俺の方なんで。

慎人 テツちゃん、後で支払いのこと、話つめよか。

哲也 せやな。

慎人 ．．．それにしても助かった。今回は本当にヤバかった。

江藤 これで借りは返しましたよ。

慎人 答えない)

さっちゃん なんですか、借りって。

慎人 なんでもない。．．．なんかハラ減ったな。ちよつと早いけど皆で昼飯行こか。

啓太 え、でもまだお昼・・・と、奥へ行こうとする)

哲也 ああ、おごったる、いう意味や。なあ。

慎人 おう。

啓太 ありがとうございます！

哲也 中華でええか？

慎人 ああ。先行っててくれ。俺もすぐに行くわ。・・・さっちゃんも、一緒に行き。

さっちゃん ありがとうございます。

哲也、出て行く。追いかける啓太の頭を さっちゃんは ぴしゃぴしゃ叩く。

啓太 ちよう、なに？

さっちゃん なんでもない。

と言いながら さっちゃんは啓太の頭を叩きながら出て行く。

慎人 頭を下げて 助かりました。

江藤 いえ。啓太さんの気合いに引つ張られました。

慎人 ・・けど、

江藤 なんです？

慎人 ・・いえ。正直、ウチの会社、この先いつまで持つんかな 思て。まあ、今にはじまったことやないですけど。

江藤 答えない)

慎人 ・・さっき前にウチにいた友樹が来たんですわ。

江藤 ・・ああ、中国へ行った

慎人 日本に帰ってきてCAD売ってるって。

江藤 そうですか。

慎人 海外の機械の精度がえらい良うなってるって言うてました。職人がやってたことは、もう大抵コンピューターで できるようになるみたいです。

江藤 そうですか。

慎人 ウチみたいな工場は、そのうち静かに消えていくんかなあ、思て。

江藤 珍しく弱気ですね。

慎人 俺、たまに考えますわ。なんで工場してるんやろうって。先もない、たいした儲けにもならへん、せやのに。

江藤 どうしてですか？

慎人 え？

江藤 工場。はじめは飲食店だったんでしょ。やっぱり、聡志さんのことを想って。

慎人 それもありましたけど・・・なんかね、呼ばれた気がしたんですわ。

江藤 呼ばれた？

慎人 信じてもらえないかも知れませんが。

江藤 呼ばれたって。

慎人 旋盤に・・・作業灯の下で、ドライコが星屑みたいに光ってて、旋盤、格納庫の飛行機みたいで。教会のパイプオルガンみたいで。

江藤 そうですか。

慎人 笑うでしょ。

江藤 いいえ。・Calling だったんですね。

慎人 え。

江藤 呼ぶという英語の。

慎人 ああ。

江藤 神様からの呼びかけ、天職って意味もあるそうですね。

慎人 ……。

江藤 きつと呼ばれたんですね。旋盤に。

さっちゃんが呼びに来た。

さっちゃん 江藤さん、

江藤 ああ、すぐ行きます。・じゃあ。

江藤、去った。

あかりが外出着で奥から現れた。手には大きなカバン。

少し遅れて美和も現れる。

あかり 慎人くん、ちょっと。

慎人 なに？

あかり さっきの電話、ウチのお母さんがこけて、大腿骨折したって。

慎人 えっ。

あかり とりあえず実家に戻るわ。

慎人 そら早よ行ったほうがええ。

あかり ……。

慎人 どうした？

あかり お母さんな、とりあえず入院してもらうけど、年が年やから、歩けんようにな

ってしまいかも、って。

慎人 ……そうか。

あかり 今後どうするかは相談してみるけど、一人暮らしやし、私が付いて面倒みな

アカンようになるかも知れへんねん。

慎人 せやな。

あかり ごめんな、こんな大変な時に。

慎人 大丈夫。啓太と江藤さんが何とかしてくれた。

あかり そうなん？

慎人 せやから こっちのことは気にせんと 安心して行き。

あかり ……すいません。行ってきます。

あかり、出て行った。

美和 ……いいの？

慎人 かまへん。

慎人と美和、あかりの姿を見送った。
暗転。

場面転換中、日誌の音声が流れる。

啓太 十一月二十五日月曜日。九時から十七時、加工作业。山一証券が潰れてビツクリした。銀行だけやなくて、保険会社も証券会社も大きいところが経営破たんしてる。今となつては社長がバブルの時に株や土地に手を出してなくてよかった。

美和 十二月十七日水曜日。九時から十二時、事務作業。介護保険がはじまった。計算がややこしくて ようわからん。誰かたすけてー。今でもカツカツやのに、これ以上何を吸い取らるねんやろ。

#5

2年後。秋。

さっちゃんが机の中の私物を段ボールに入れてる。

美和が奥から現れた。

美和 文房具欲しいものあったら持っていって来ていいよ。

さっちゃん ありがとうございます。

美和 物片付けたら急に広くなつたみたいやわ。

さっちゃん そうですね。

美和 新しい仕事は 見つかったん？

さっちゃん とりあえず派遣に登録だけしようと思つて行つたら、すぐ決まりました。

美和 派遣。

さっちゃん ええ。私ぐらいの年で 事務を正社員で探つてるとこ あんまりないですから。ほとんどがパートか派遣です。時給はそれほど高くないですけど、勤務時間も休みもキツチリ決まってますし、残業代はつきますから。

美和 ごめんな。

さっちゃん いえ。・美和さんの方が大変でしょ。テツさん、今から新しい仕事つて。

美和 まあ、新しい言うても 今まで付き合ひのある人たちから なんとか仕事もらつて 独りでブローカーみたいなことやってるだけやし。

さっちゃん ほんなら美和さん、会社二つ分の事務してるんですか？

美和 会社 いうても どっちも ほとんど個人みたいなもんやん。永和の仕事はもう、今までに売った機械の修理と、あとはタガネの注文が ボチボチ入るだけやから。

さっちゃん ええ・・

美和 でも確かに仕事は少ないけど 二つ分の事務処理は面倒くさいな。まだ慣れへんから ようハンコ間違えるし。

さっちゃん、少し笑った。

啓太が奥から現れる。

啓太 お疲れ。

さっちゃん お疲れ様です。

啓太 送り状 どこ？

さっちゃん その引き出し。

啓太、伝票を書き始める。

啓太 あれ、なあ さっちゃん、宅急便の大きさとどれぐらいまでいけたっけ？
さっちゃん 百六十センチ。重さは二十五キロ。

啓太 重さは大丈夫やけど、百六十センチかあ。ビミョーやな。

さっちゃん それ以上大きくなったら送り状が変わるよ。

啓太 ちよっと計ってくるわ。

さっちゃん どこ送るの？ 私、書いどこか？

啓太 あー・・・いいわ。

さっちゃん いいよ、私も自分の荷物送るし。ついでやから。

啓太 いや・・・いい。ありがとう。

さっちゃん わかった。

啓太 えっと、メジャー、メジャー・・・

さっちゃん そこ。

啓太 おお。

啓太、メジャーを持って出て行った。

さっちゃん 世話しないなあ。

美和 啓太も慣れてないんよ。細かいことまで全部自分でせなアカンから。

さっちゃん ・ ・ ・何か分からないことがあったら 電話ください。

美和 ありがとう。

さっちゃん これ、出して、帰ります。

美和 うん。ごめんな、社長おらんで。もうすぐ帰って来れるって言ってんけど。

さっちゃん いえ。なんか あらためて挨拶とか寂しいから このままでいいです。

美和 そう。

さっちゃん ありがとうございます。お世話になりました。

さっちゃん、去った。

美和、さっちゃんの机のそばにいて、ペン立てや 引き出しの中を見る。

美和 好きなん持って行きって言うたのに、律儀に全部置いていって・・・。

慎人が現れる。少し遅れて啓太が入って来る。

美和 あ、今 さっちゃんが・

慎人 会うた会うた。なんかまあ、慣れへんな、こういうのは。寂しなるわ。

美和 新しいとこ、派遣やって。時給は高くないけど残業代はつくって。

慎人 そうか。そら その方がええわ。な、啓太。

啓太 さっちゃんは 勇気があると思います。

慎人 せやな。

啓太 さっちゃんだけでなく、シユンも、トモさんも、テツさんも、社長も、みんな。

慎人 そうか？

啓太 このまえ、映画見たんです。船の上で生まれて、ずーっと船を降りんと船と一緒に死ぬ男の話。それ見た時、あー、これ、俺のことやわ っと思っただんです。この工場は いつまでここにあるんか わからへん。でも俺はここを離れて 終わりのない町の中で生きていくのが怖いんやなって。怖いっというか、始まりがあって、終わりがあある この工場に居りたいんやな、 って。

慎人 そうか。

啓太 啓太が定年になるまで、どうか面倒みる」 って言うてくれた 社長の言葉、信じますよ。

慎人 ・・お前・・荷が重いわ。

啓太 仕事、戻ります。

啓太、去った。

美和 責任重大やけど、始めてもうたからには、できるとこまで やるしかないよ。

慎人 ・・ああ・・。

美和 あ、そうや。これFAX。確認して返事くださいって。見といてな。私ちよっと 銀行行って、買い物してくるから。

慎人 わかった。

美和、出て行った。慎人、書類に目を通し始める。

ややあって、あかりが入り口にあらわれた。

あかり ただいま。

慎人 あかりさん、

あかり ごめんな。お母さん亡くなって、いろいろ片付けてたら遅くなってもうて。

慎人 ・・なんで？

あかり なんでやる。・呼ばれた気がしたから、かな。

慎人 工場に？

あかり どうやる。

慎人、あかりを抱きしめた。

工場の作業場から旋盤の音が鳴り響く。溶暗。

終幕